

《論 文》

『日本広東学習新語書』所収仮名音注の特徴について

矢放 昭文

はじめに

小稿は神田外語大学「神田佐野文庫若林正治コレクション」所蔵『日本広東学習新語書』（以降、小稿では『新語書』と略称する）が収録する仮名音注について、その特徴を試掘的に報告することを目的とする。『新語書』は、併せて11冊、附録1冊、総計411帖からなる書写資料である。書写編集の時期については各冊表紙に記載があり、第一冊については明治三十二年（1899）九月十五日ヨリ十月九日ニ至、と記されている。第貳冊については；十月十日ヨリ十月廿四日マデ、以下各冊毎に書写年月日が記載されており、第三冊；十月廿五日ヨリ十月三十日マデ、第四冊；十月～三十一日ヨリ十一月七日マデ、第五冊；十一月八日ヨリ同月廿一日マデ、第六冊；十一月廿二日ヨリ十二月十五日マデ、第七冊；十二月十六日ヨリ二十七日マデ、第八冊；十二月二十八日ヨリ明治三十三年一月二十七日マデ、第九冊；一月廿八日ヨリ二月廿三日マデ、第十冊；明治三十二年十二月二日ヨリ三十三年一月二十三日マデ、第十一冊；三十三年一月廿四日ヨリ二月廿八日マデ、と記されている。1899年9月15日～1900年2月28日まで、ほぼ半年間を費やして編集・筆録されたことが判る。

各帖は片面十四行、上下二段から構成され、上段には漢語語彙・語句、その右側又は下側に片仮名による音注が付されている。また下段には漢字と片仮名により、該当する日本語訳が記載されている。

各帖上段に記載された漢語語彙・語句に付された片仮名音注は、その語音特徴に基づき少なくともA・B二類に分けることが出来る。小稿では特にA類について、その語学面での特徴について初歩的に観察した結果を報告したい。

1. 「台湾」について

『新語書』に掲載された文例・記事にもとづけば、同書の成立背景についていくつか重要な点を知ることができる。例えば、本書には具体的地名を含む文例として；

「爾（曾）去英國也不（曾）」「アナタハ英國へ、御出ナサイマシタカ」（P1640102）⁽¹⁾

「爾何時要去日本」「アナタハ何時日本へ、御出ナサリマスカ」（102）

「伊（曾）去德國」「彼人ハ獨逸へ往タ^レガアリマス」（104）

「這次東京批、何時會到」「今度ノ郵便ハ、何時東京カラ到着致シマスカ」（281）

「到神戸爾欲幾多工錢」「神戸迄、料金ハ如程デスカ」（289）

「到上海、一句若干工錢」「上海迄ハ一語何程ノ料金デス」（289）

「福州電報局」（287）、

など、英國、獨逸、日本、神戸、上海、福州などの旅行先、或いは電報発信先の国名、都市名を認めることが出来る。また一方で台北、臺灣、基隆、滬尾など地方色の濃い各地の都市名、地名も登場する。

「台北比台南、那一所在較大」^{ドチラ}「台北ト台南トハ何方が大キイデスカ」（103）

「我值基隆、坐頭幫（遭）火車來」「私ハ一番^{ドチラ}氣車デ、基隆カラ参リマシタ」（127）

「台北嘗堅氷落雪否」「台北デ水ガ凍リ、雪ガ降ルコトガ、アリマスカ」（129）

「台北比滬尾較大」「台北ハ滬尾ヨリ、大キウゴザイマス」（105）

「過一年我要去厦門」「モウ一年過タラ、厦門ヘ参リマス」（105）

滬尾は現在の新北市淡水地区に該当し、光緒12年（1886）に砲台が建設された所として知られており、今日では観光の名所にも数えられている。

一方、厦門は台湾海峡を挟み大陸側に位置する港湾都市であり、洪武20年（1387）に築城されて以来、徐々に発達してきたことが知られている。地理的要因に基づく交易の盛行とともに、閩南地域から台湾への移住者の出発地として顕著な機能を担ってきており、台湾とは特に密接な関係を形成してきた都市

でもある。(105)の例文はその交通の一端を物語るものと思われる。

また第十一冊(466-471)には三貂(サンホウ、サンメウ(サンチャウ))、澳底湾(オータイワン)にはじまり、西嶼(シージー)に至るまで、計66ヶ所の台湾内の地名を収録しており、港湾を含む要衝地名を記録したものと思われる。

さらには;「臺灣字、敢是如此嗎」「台湾ノ字ハ此様デセウ」(140)、「臺灣話、請坐、日本話怎樣講」「台湾語デ、(請坐)ト云フ事ハ、日本語デハ何ト云ヒマスカ」(144)など、「臺灣字」「臺灣語」を話題として「台湾語では～と言うが、日本語デハ何ト言ウノカ」など、質問形式の文例も多い。いずれにしても「台湾語」「日本語」はこの『新語書』が内包する言語面での背景を知るための重要なキーワードと考えてまちがいはない。

2. 「新語」について

知られるごとく、明治28年、光緒21年(1895)の下関条約締結後、明治政府は台湾をその支配下に置いた。従って『新語書』が成立した1899~1900年頃の台湾は、ちょうど日本統治時代(1895-1945)の初期に該当する。東京、英国、独逸などだけでなく、厦門、福州、上海など、海上交通を利用して到達出来る地点をも具体的に会話文に収録していることから判断できることとして、編著者は、日本時代初期の台湾を拠点としつつ、域内はもとより海外への移動と通行、通信など生活面での極めて実地的な華語の修得を目的としていたこと、また同時に、被統治者である台湾居住華人の生活、交通、通信上の言葉を知ることの重要性も、当然ながら覚っていたことなどを指摘することができる。また『新語書』の謂う「新語」については、おそらく「新しく日本領になった台湾の言葉」を意味するものと思われる。「新語」は統治者側の視点に基づいた呼称であろう。

一方、日本の属領に入っていたとはいえ、明代以降清末に至るまでの台湾における中華文化の諸般に渉り活用されていた漢文力は、当然ながら深いところに根ざしていた。当時の台湾に居住する人々が商業活動などで連絡を取り合う際の媒介手段は、文言文を主体とする書面言語であったことも言を俟たないであろう。白話文体の普及を目指した五四期の文学革命は、胡適(1891-1962)

が民國6年(1917)に公開した「文学改良芻議」をその始まりの契機とするとされているが⁽²⁾、その到来までさらに十数年の年月を必要としていたのである。この点で『新語書』が収録する会話文は、当時の台湾で行われていた口語体の一面を物語る資料として、貴重な価値をもつ。特に本書の片仮名音注がもたらす言語情報は、時代と地域を特定出来る、という点で重要な価値を持つものであり、この時期の台湾社会で通行していた言語の一端を物語る、珍しい言語資料であることはほぼ間違いない。

3. 「広東」について

『日本広東学習新語書』の「広東」が意味するところについて触れておきたい。端的に言って『新語書』帙面に記される「広東」は、今日の広州、香港を中心に珠江三角州を取り囲み、さらに西方に広く分布・通行する「広東語」(学術的には「粵語」と称されている)とはその様相を全く異にしているが、この点については機会を改めて述べたい。

「広東」については橋本万太郎1972⁽³⁾に詳細な解説がある。それによると、台湾に移住する以前の、祖先の地名を語る伝統、一種の客家アイデンティティーにもとづくものと考えるべきであり、大抵が4～5世代前に広東から移住したものである、という。「私共は300年前に広東から台湾に来ました」という発言を著者自身、直接聞いたことがあるが、台湾に移住する以前の数世代前、自分たちの先祖は広東から出発した、ということであろう。『新語書』帙面の「広東」もまさにこの点に由来するものと考えることが出来る。

4. 白話音

この点を最初に明示するのは第1冊に記載される人称代名詞、およびその所有格型の音注である。第一冊、第一篇単語、改行したうえで「第一章 代名詞類」と分類項目を記すところから本書は始まり、一行目上段「我」の下右側に「ガイ;gai」左側に「ゴー;goo」、下段には「ワタシ。私ノ」と日本語訳を記している。二行目以降も同様に上段「爾」下右に「ニー;nii」、下段には「アナタ。オマヘ」、三行目上段「伊」下右側「イー;ii」、左側「キー;kii」、

下段右側「アノヒト。アレ」左側「彼人 彼」と記載している⁽⁴⁾。

「はじめに」でも触れたが、『新語書』掲出の語彙・語文には二種類の片仮名音注を付している例が多い。二種類の音注を便宜的に「語音 A」「語音 B」として、以下に人称代名詞等をまとめると次のようになる。

人称代詞（単数）

	字体	語音 A	語音 B
自称	我	ガイ gai	ゴー goo
対称	爾（的）		ニーテ°ツ nīthetsu
他称	伊	キー ki	イー ii
疑問称	甚麼（人）	マカイギン makai	

単数形の人称代詞「我」について語音 A は「ガイ：gai」と表記する。自称代詞の音節末尾に /-i/ を持つ語形は、漢語方言の中では極めて特徴的である。例えば『汉语方言词汇』（第二版）⁽⁵⁾によれば、梅県 [𠵹 ɲai]、福州 [我 ŋuai]（pp.548）2カ所のみである。但し福州方言は『新語書』がもたらす他の特徴とは符合しないため、小稿ではとりあげない。また他称代詞「キー：ki」の語形近いものとしては梅県 [𠵹 ki]、広州 [𠵹 k'øy]、陽江 [其 k'ei]、建甌 [𠵹 ky] を挙げることができる（上掲書 pp.549）。

さらに疑問称を見てみよう。「甚麼」に対して『新語書』は「マカイ：makai」を注しているがこれは所謂「白話音」であり、「文言音」ではない。

1899～1900年当時は、衰退はしていたものの未だ清代であり、伝統的な文言音教育は各地の書院や書房（すなわち寺子屋）⁽⁶⁾で行われていた。『三字経』『四書』『唐詩』を文言音で朗唱する教育は、少なくとも、光緒31年（1905）、科学が廃止されるまでは継続していたと伝えられており⁽⁷⁾、1919年の五四文学運動時期に志向された言文一致体を目標とする白話文体は、『新語書』のインフォーマントには想像もできないものであったと思われる。

また白話音は、特に教育により伝承されてきたわけではない。日常の会話などに使用する言葉から、世代を越えて伝承されると同時に、人々の間で相互に通じるように、或いは矯正し、或いは自分で帰納して身につけ使用する話し言葉音が白話音である。

『新語書』インフォーマントが意味上近似の漢字を充当したが故に、「甚麼」

に対して「マカイ：makai」を片仮名音注として付したことは、他に方法のない、やむを得ない処置であった。字体「甚麼（什么）」はインフォーマントの立場からみれば、意味を知り伝達するための媒体であったが、言語特徴の本質を究める立場からすれば直接の手掛かりとは言えない。

5. 客家音

語音 A は『新語書』の随所に見られる白話音であり、その人称代詞の自称・他称語形については、梅県音が最も近いと判断できることは、《汉语方言词汇》に基づく上記記述の如くである。一般に梅県音は、漢語方言学では客家方言の代表地点とされているが、時代的に『新語書』に近い客家語資料として MACHIVER (1926)⁽⁸⁾を利用することができる。語音 A について《汉语方言词汇》梅県音に MACHIVER (1926) の記録音を加えると以下の如くにまとめることができるとともに「我」「伊」「甚麼」の音型に一致点を認めることができる。

字体	語音 A	梅県音	MACHIVER (1926)
我	ガイ「厓」	厓 nai ㄟ	pp.519. 我 Ngo. I, we. Our's : mine, The proper character is <i>Ngó</i> . Coll. Is <i>Ngái</i> .
爾	ニー		pp.525 爾 Ni. You. Yours. Coll. <i>Ni</i> ,
伊	キー	佢 ki ㄟ	pp.254. (伊) 佢 .The third personal pronoun, He, she, it. The character is read <i>Khi</i> .
阮的	ガイガイ		阮 : gun ⁵³ (厦) guan ⁵³ (漳)
甚麼	マカイ	乜个 mak ㄟ keʔ	pp.451. 甚麼 : 乜個 <i>mak kài</i> : what ?

『新語書』(044) の「阮的（上段）ガイガイ「私共ノ」（下段）については、語音 B として「グワンテツ」を記している。語音 B は、非白話音であり、インフォーマントにとり文言音或いは官話音であったと推断できるが、その音的性格は、おそらく閩語音であろう。梅祖麟（2000）に基づけば厦門音 gun⁵³、漳州話 guan⁵³、のうち漳州音を該当音とすることが可能である。つまり『新語書』片仮名音注の非白話音には、文言音としての漳州話音の混入が考えられるのである。

なお自称複数を示す字体「阮」については、梅祖麟2000⁽⁹⁾に閩方言としての使用例を認めることができるが、『新語書』全篇を通しての結果については別の機会に報告したい。

6. 韻母について

客家音韻母の重要な特徴として、Jerry Norman1986⁽¹⁰⁾、竺家寧1998⁽¹¹⁾、羅肇錦1990⁽¹²⁾等が指摘する如く、四呼が揃わず撮口呼を欠くこと、が挙げられる。

『新語書』では“去：キー (*k'i) ”、“舉：キー (*k'i) ”、“捲：キエン (*k'ien) ”、“削：シアツ (*ɕiaʔ) ”、“裙：キウン (*k'iun) ”、“魚：ンム (*ŋm) ”など、いずれも齊齒呼音に記されており、北京音（官話音）の撮口呼から移行していることが明白である。（ ）内の語音はいずれも MACHIVER (1926) に基づく。

7. 声母について

すでに Jerry Norman1986、竺家寧1998、羅肇錦1990等により詳しく論じられている客家語の特徴のひとつに、平仄を問わず、中古漢語全濁声母が有気音に発音されること、が挙げられている。『新語書』では「辦（並）：パン」「抱（並）：パウ」「第（定）：テー」など頻出常用の全濁声母字が有気音で表記されている。この点も客家語の特徴に符合する事実である。

8. 以・影・云三声母について

『新語書』片仮名音注の大きな特徴として、中古音の以母、影母、云母、日母音にサ行濁音（ザジズゼゾ etc.）で表記される字例を認めることができる。特に前三者は特徴的である。サ行濁音を小稿では /z/ 音に比定するが、該当声母数例を『新語書』から挙例すると、以下の如くである。

雲：ジュン 王分切、臻合三平文云

雨：ジー 王矩切、遇合三上虞云

音：ジム 於金切、深開三平侵影
 英：ジン 於驚切、梗開三平清影
 若：ジョッ 而灼切、宕開三入藥日
 以：ジー 羊己切、止開三上止以
 與：ジー 余呂切、遇合三上語以

黄雪貞1987の報告⁽¹³⁾には、この現象を「野」「有」「養」を例字として、興寧（広東省梅州市）連平（広東省河源市）での採集音「*zə*、*zə̃*」、「*zu*、*-*」、「*zəŋ*、*zəŋ̃*」を収録している。なお、三字の中古音はそれぞれ「羊者切；假開三上馬以」、「云久切；流開三上有云」、「餘兩切；宕開三上養以」である。

また台湾海陸客家語の該当字例については、近年、遠藤雅裕2016⁽¹⁴⁾により詳細に報告されている。遠藤2016の同音表（pp.14-62）が収録する /ʒ/ 声母字と、対応する『新語書』の字音を、限定的ではあるが、対比すると以下の結果を得ることができる；

『新語書』 音	遠藤雅裕2016所収 /ʒ/ 声母字
要：ジャウ 要：ヤウ	/ʒau/：影妖邀腰日繞（陰平53），以搖謠窯（陽平55），以舀（上35），以耀 影要（陰去21） pp.18
鹽：イヤム	/ʒam/：影闇（陰平53），以鹽（陽平55），以鹽焰云炎（陽去33） pp.21
煙圓：ジャン 遠：ヤン	/ʒan/：以演影煙冤淵怨駕云援（陰平53），以延緣鉛云圓員園日然厘丸（陽平55），云遠（上聲35），影燕宴云院縣縣雁（陰去21） pp.23
雲：ジュン	以勻云雲（陽平55），影熨（陰去21），日潤潤云韻運（陽去33） pp.49
兩：ジー 以：ジー	/ʒi/：以影醫衣依（陰平53），以余餘愉移姨日已寅如漁而兒乳（陽平55），云雨影椅（上35），以譽易異裕意億（隱去21），以預（陽去33） pp.55
飲：ジム 音：ジム	/ʒim/：影音陰蔭（陰平53），以吟淫影飲（上21），日任（陽去33） pp.56
英：ジン	/ʒin/：影因姻櫻英以引（陰平53），以蠅仁仍（陽平55），影印應（陰去21），影應（陽去33） pp.57
有：ユー	/ʒiu/：以西影憂有友（陰平53），以柔優由油游影尤郵又（陽平55），云又（上35），影幼（隱去21），以右佑柚（陽去33） pp.58
一：ヂッ、ジッ	/ʒit/：影一益（陰入5），以逸翼譯役（陽入32） pp.59

また遠藤2016では任、吟、前者は日母、後者は疑母字も同系列（/ʒ/ 声母

字)に入る。この点は『新語書』では不明である。『新語書』「有：ユー」「遠：ヤン」の表記は遠藤2016とは合わないが語音 B に属すると思われる。「要」には「ジャウ」「ヤウ」の二音を認めることができるが、これも冒頭で言及した語音 A、語音 B の二層が混在していることの証しであろう。

音価について、遠藤雅裕2016は /z/ 音 (Fricative Retoraflex：そり舌音)ではなく /ʒ/ 音 (Fricative alveolar：後部歯茎音)を措定しており、同じ Fricative ではあるものの、黄雪貞1987の報告とは調音部位に違いがある。但し片仮名でその違いをしめすことは困難であるため、当然の帰結ではあるが、『新語書』が報告するサ行濁音字では、その違いは反映していない。

小結

- (1) 自称代詞の語形、音節末尾に /-i/ を持つこと。
- (2) 撮口呼を欠くこと。
- (3) 常用の全濁声母字が有気音で記されること。
- (4) 中古音の以母、影母、云母音字がサ行濁音で表記されており Fricative Retoraflex または alveolar であったと推定出来ること。

以上の4点より、神田外語大学「神田佐野文庫若林正治コレクション」所蔵『日本広東学習新語書』の片仮名音注のうち A 類は客家方言の特徴を示すものと判断出来る。さらに(4)の特徴は客家方言の中では、梅県客家語とは異なる「次方言」的特徴と見做すことが出来る。もとより、客家方言は、歴史的にみれば人々の移動過程が複雑であり、多様な言語要素を含んでいると一般に考えられている。その点で言えば(4)の特徴は貴重な点であり、或いは、客家語の古層に属する特徴であるかもしれないが、この点については後考を待ちたい。

註

- (1) P1640102は各頁(写真撮影)に付される通し番号である。P および1640は全ページに共通するため省略し、以降、下3桁のみを記す。
- (2) 五四期文学革命の経年の漸進性については、平田昌司1999「目の文学革命・耳の文学革命——一九二〇年代中国における聴覚メディアと「國語」の実験」(『中國文學

- 報』第五十八冊、京都大學文學部中國語學中國文學研究室編輯、pp.75-114.)に詳述されている。
- (3) 橋本万太郎1972『客家基礎語彙集』アジア・アフリカ言語文化研究所。
- (4) ここでのローマ字表記は、服部四郎1979『音韻論と正書法』大修館書店、にもとづく。
- (5) 《汉语方言词汇》(第二版)・北京大学中国語言文学系語言学教研室編) 1995年。
- (6) 王育徳1982『台湾語入門』、日中出版、pp.63.「文言音と白話音」にもとづく。
- (7) 科举の廃止については阿倍洋2000『中国の近代教育と明治日本』、龍溪書舎、pp.39に詳しい。同書記述によれば、1901年に試験内容の改革、1904年の合格者定員の削減をへて、1905年9月、張之洞、袁世凱らの上奏「会奉請立停科举推广学校摺」を受けてその完全廃止に至っている。
- (8) D. MACHIVER (1926) "A CHINESE-ENGLISH DICTIONARY, HAKKA-DIALECT, AS SPOKEN IN KWANG-TUNG PROVINCE", REPRINTED (復刻版, 1982, 南天書局, 台北。)
- (9) 梅祖麟2000〈閩南語複數人稱代詞形成合音的年代〉《語言變化與漢語方言・李方桂先生記念論文集》丁邦新・余霽芹編, 中央研究院語言學研究所籌備處・美國華盛頓大學, 頁261-269。
- (10) Jerry Norman1986, *WHAT IS A KEJIA DIALECT ?* The Second International Conference on Sinology, Academia Sinica, December 29~31, 1986, Taipei, Republic of China.
- (11) 竺家寧1998《中國的語言和文字》pp.194-195.
- (12) 羅肇錦1990《台灣的客家話》臺原出版社, PP.92.
- (13) 黃雪貞1987〈客家話的分布与内不異同〉《方言》1987年第2期, 81-96.
- (14) 遠藤雅裕2016『台湾海陸客家方言語彙集・附同音字表』中央大学學術図書89、中央大学出版部

[付記]: 小稿は、JSPS 科研費(課題番号17K02753)による研究成果の一部である。